科目ナンバリング	U-LAS70 10001 SJ50						
授業科目名 <英訳>	ILASセミナー：錦絵新聞からみる近代メディアの出現 ILAS Seminar : Emergence of Modern Media and Nishiki-e Shinbun (colored woodblock prints in newspapers)			担当者所属職名・氏名	人文科学研究所 助教　　金　智慧(キム ジヘ)		
群	少人数群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	ゼミナール（対面授業科目）
開講年度・開講期	2024・前期	受講定員(1回生定員)	10 (8) 人	配当学年	主として１回生	対象学生	全学向
曜時限	金5	教室	人文科学研究所（本館）１階講義室 (本部構内)			使用言語	日本語
キーワード	メディア / マスコミ / 新聞 / 明治文学						

[授業の概要・目的]

現代社会には、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど大衆向けに情報を伝達する多様な媒体があり、われわれは日々世界各地の溢れる情報と接しながら生きている。近代日本社会においてこうしたマスメディアの発展の礎になったのは、新聞であった。文久～慶応年間、幕府が外国事情を報じるために刊行した欧字翻訳新聞や、居留地を拠点として刊行された民間新聞がその始まりである。最初は日刊紙ではなく、定期刊行物に近いかたちであったが、やがて明治時代に入ると、毎日刊行する形式が基本となる。さらに、電報の導入や印刷技術の発達に伴い、朝夕刊・新聞広告・読者からの投書・従軍記事といった、現在にもみられる新聞形態の要素が定着していく。本授業の一つの目的は、新聞という身近なマスメディアが幕末明治期にわたり生成、発展した歴史を辿ることにある。

そのうち、とくに調査対象として注目するのは錦絵新聞である。錦絵新聞とは、『東京日日新聞』『郵便報知新聞』などの新聞記事を基にした文章と浮世絵を載せ、事件を報道する一枚摺の読み物で、江戸時代のかわら版と明治時代の新聞の過渡期の産物である。新聞の発達は近代以前の文学・美術・出版との深い関わりを持っており、錦絵新聞の講読を通して両者の関係性を把握することは本授業のもう一つの目的である。

[到達目標]

幕末明治期において新聞が発展した歴史を概観し、新聞の発達と当時の社会情勢（郵便・電報、印刷技術、言論統制の法令、戦争など）がどう関わっているのかを把握する。

また、錦絵新聞の読解を通して、近世／近代の読者の受容形態や文体の変化、新聞の機能と役割の拡大といった問題について議論し、理解を深める。

[授業計画と内容]

第1回　江戸時代のかわら版と近代新聞の始まり
第2回　明治時代の新聞の隆盛、大新聞と小新聞
第3回　郵便・電報制度の確立、印刷技術の発展
第4回　錦絵新聞の誕生と終焉、明治期の戯作の出版状況
第5回　錦絵新聞の講読①
第6回　錦絵新聞の講読②
第7回　錦絵新聞の講読③
第8回　錦絵新聞の講読④
第9回　錦絵新聞の講読⑤
第10回　錦絵新聞の講読⑥
第11回　錦絵新聞の講読⑦
第12回　錦絵新聞の講読⑧

ILASセミナー：錦絵新聞からみる近代メディアの出現(2)へ続く↓↓↓

ILASセミナー ：錦絵新聞からみる近代メディアの出現(2)

第13回　錦絵新聞の講読⑨
第14回　錦絵新聞の講読⑩
第15回　フィードバック

第5～14回目の授業では、前半は教員による講義、後半は受講者による錦絵新聞の講読と討論で進める。授業の進行状況を考慮し、明治期の新聞の発展にまつわる諸相（社説の誕生、讒謗律・新聞紙条例による言論弾圧、「続き物」の流行、新聞と雑誌、朗読から黙読への転換など）を講義のテーマとして取り上げる。

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

平常点（40%）、発表（60%）
平常点には、出席率（20%）・授業内での参加度と授業後に提出するリアクションペーパーの内容（20%）が含まれる。なお、特別な理由なしに４回以上授業を欠席した場合には不合格とする。

[教科書]

使用しない
レジュメは授業中に配布する。

[参考書等]

（参考書）
【参考文献】
土屋礼子『大阪の錦絵新聞』（三元社、1995年）、興津要『明治新聞事始め　［文明開化］のジャーナリズム』（大修館書店、1997年）、土屋礼子『大衆紙の源流：明治期小新聞の研究』（世界思想社、2002年）、千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞：東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』（国書刊行会、2008年）。

[授業外学修（予習・復習）等]

講読の担当者は各自テーマを立てて調査・分析し、発表を行い、他の受講者は予め講読の対象となった記事を予め読んでおく。

[その他（オフィスアワー等）]